



全日畜だより

第 65 号

2025 年9月30 日
<https://www.alpa.or.jp/>

SDGs ワークショップ（鹿児島会場）を開催

全日畜 SDGs ワークショップ（鹿児島会場）プログラム

1 ワークショップの概要

- ◎ 開催日 令和7年9月4日（木曜日） 13:00 ～ 16:00
- ◎ テーマ 畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来
- ◎ 会場 鹿児島サンロイヤルホテル 2階「開間の間」
〒890-0062 鹿児島市与次郎1丁目8番10号 TEL 099-253-2020

2 ワークショップの構成は「話題提供」「事例発表」「意見交換」の三部構成

◎ 開会

会場には開催地の鹿児島県ほか5県から畜産生産者や行政機関、飼料メーカーなどの関係者約90名が参加。「話題提供」「事例発表」「意見交換」の三部構成の集会は、全日畜の鶴園眞佐彦理事の開会挨拶でスタート。

（写真：開会挨拶の鶴園理事）



◎ 開会挨拶から

主催者を代表して挨拶された鶴園理事は、全日畜は8年前からJRAの助成によりスマート畜産、雇用問題、危機克服などのテーマで事業を実施してきた。今回はSDGsをテーマにしての開催。昨年は青森、千葉、名古屋でワークショップを開催して、今回は鹿児島でのワークショップとなった。2024年には食料・農業・農村基本法が25年ぶりに改正されて、今後5年で生産基盤を整え、農業生産基盤を守ることが打ち出された。直面している課題のコメの問題や耕畜連携の問題など、今日は畜産をめぐる新たな課題への対応のヒント等がいただけるものと期待している、と挨拶。

◎ 話題提供者と事例発表者の紹介

第一部の話題提供では鹿児島県畜産振興課の川野様が講師。第二部の事例発表では、鹿児島県の高崎畜産の高崎様、宮崎県の江夏商事の原園様、山口県の秋川牧園の村田様の3名の畜産生産者を講師にお招きしました。

（写真：講師紹介）

第一部 話題提供の講師紹介



鹿児島県 畜産振興課
技術主幹兼企画経営係長
川野 実 様
（行政機関）

第二部 事例発表の講師紹介



（株）高崎畜産
専務取締役
高崎 淳史 様
（肉用牛）



江夏商事（株）
生産部 部長代理
原園 和洋 様
（肉用鶏）



（株）秋川牧園
生産部次長
村田 洋 様
（肉用鶏等）

「鹿児島県における畜産の現状と課題」

第二部 事例発表 株式会社 高崎畜産 専務取締役 高崎淳史 氏

「U-motion によるDX技術導入と アニマルウェルフェアに配慮した肉用牛生産」

◎ 論旨

(写真：講師の高橋 氏)

- ・ 2007年創業で、今年は18年目。社員20名、黒毛和牛繁殖356頭、肥育2,634頭。耕作面積は78 ha、刈取委託は47 ha。グループ会社の高崎ファームは4,060頭飼養しているのでグループ全体では7,000頭を飼養している。
- ・ 良質堆肥を製造し、海外へ輸出している。堆肥舎では10日に1度は攪拌し、発酵菌を入れて発酵を促進している。牛舎内には大型換気扇や細霧装置を入れていて、屋外より2～3℃低く、AWにも適合している。
- ・ 牛の行動管理システムU-Motionを令和5年から導入し、繁殖・肥育成績の向上、事故防止対策に役立っている。繁殖牛では、発情・分娩徴候を把握し、繁殖成績が向上している。肥育牛は疾病、起立困難の早期発見により、事故が防止できている。U-Motionの導入に当たり、令和4年度の畜産クラスター事業を利用し、その後の増頭分は令和7年度のクラスター事業を適用する計画である。
- ・ U-Motionでは、首、耳に送信機を取り付け、データ送信、サーバー処理し、利用者はPC、タブレット、スマホからサーバーへアクセスしてアラートやデータ、グラフを受信する。U-Motionにより従業員の繁殖に対する管理意識が向上し、AWへの取り組みにより疾病及び事故の発生が減少している。個体のモニタリング項目は、動態、横臥、起立反芻、横臥反芻、起立静止、採食の6項目が減少している。
- ・ 畜産DXはハード、ソフトともイニシャルコスト、維持管理コストが高く経営を圧迫する。畜産DX技術の操作手順は、高齢者や機械に不慣れな人間には難しいため、他のシステムとの連携による簡便化が必要である。
- ・ 飼養管理は作業従事者の目視・確認の徹底を基本とし、畜産DXによる家畜の生産管理や作業従事者の労働環境を改善することで、生産性の向上を図る必要がある。 (以下の画像：講演資料から)



海外輸出 ラオス、カンボジア、ミャンマー、ベトナム



フレコン出荷



ラオス



カンボジア

畜産DX・AWの取り組み成果

- ・ 繁殖牛においては、授精のタイミングが可視化され分娩間隔の短縮や繁殖成績が向上
- ・ 肥育牛においては、起立困難牛をアラートで知らせることで事故防止や従業員の管理作業が軽減
令和6年度起立困難牛の確認回数 123回
うちアラートお知らせ回数 95回
肥育牛の事故頭数 12頭 (事故率0.5%)
- ・ 従業員の繁殖に対する管理意識が向上
- ・ AWの取り組みにより、疾病及び事故の発生が減少

第二部 事例発表 江夏商事株式会社 生産部 部長代理 原園和洋 氏

**「捕鳥作業の自動化と
アニマルウエルフェアが作る未来展望」**

◎ 論旨

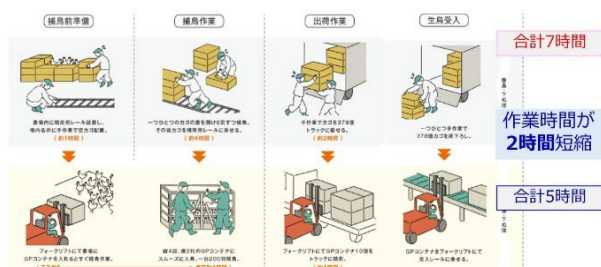
- 宮崎市で1900年に設立。食鳥の日運搬量は6.7万羽で、将来は8.8万羽に増産する計画である。生産部門では、育種改良や機械化により、出荷日齢を短縮し生産羽数は増加している。しかし、捕鳥・運搬段階で、カゴ捕鳥による重労働のため人手不足が生じ、日当たり捕鳥羽数が減少し、生産増に追いつかなかった。処理・加工部門では、処理能力は増加したが、捕鳥羽数が確保できなく実稼働が制限されていた。



(写真：講師の原園 氏)

- ・ カゴ捕鳥では、6～7羽/箱（約25 kg）で搭載車1台当たり378箱積むが、捕鳥後、箱を車に8段積み上げるなど、すべて手作業で、1日1万箱を出荷しなければならず、重労働であった。このため、新規採用に応じる人が少なく、採用してもやめる人が多かった。ベテランの社員は高齢化し定年でやめていく。また捕鳥にはコツがあり、捕鳥技術の習得に時間を要する。このように捕鳥がボトルネックのため、人も羽数も頭打ちとなった。
- ・ 捕鳥対策として、外国製（イタリアCMC社）の捕鳥コンテナを導入した。これはEUのAWの認定を受けたもので、床面の通気性がよく、引き出しとなっているカゴの下が汚れず、換気ができ、省力化できる。このコンテナ1台に200羽を入れ、輸送車には1台当たり10台のコンテナを載せるため、専用のフォークリフトを導入した。このことで、軽労化され、捕鳥時間も1回当たり7時間から5時間へ2時間短縮した。このコンテナ輸送は、現在、グループ全体で90%以上となっている。トラック当たりの運搬羽数は20トン未満、20トン超とも生鳥カゴに比べ若干減少した。コンテナを安全に運ぶため、トラックを改造し、屋根を下げて、コンテナの外枠を固定するようにした。
- ・ 今後は、CMC社の自動捕鳥機を導入する計画である。自動捕鳥機を入れることで、①捕鳥作業が楽になり、危険な作業が減る、②鶏の損傷を減らす、という2つの効果が期待できる。自動捕鳥機はEUでAWの認定を受けている。捕らえた鳥はベルトコンベアで運ばれ、4人で8,000羽/日の捕鳥が可能となる。捕鳥コンテナにより、働き手を限定しない、省力化と雇用の拡大、人と鶏の両方にやさしいAWが実現され、さらに未来を見据え、自動捕鳥機導入の挑戦を続ける。当社が捕鳥機の実用化を図ることで、業界全体で取り組めるようになればよいと思う。（画像：講演資料から）

成果（カゴvsコンテナ時間比較）



将来展望（自動捕鳥機の導入）



「ともに歩んできた 16年がもたらしたもの」

第三部 意見交換（会場参加者も参加しての意見交換会）

◎ モデレーターのご紹介

ワークショップ鹿児島では、話題提供、事例発表、意見交換のモデレーターとして、全日基常務理事の引地和明氏をお招きしました。意見交換では、予定時間を超えて積極的な質問が飛び交った集会となりました。



一般社団法人
全日本配合飼料価格畜産安定基金
常務理事
引地和明 様
(畜産団体)

(写真：進行役の引地 氏)

◎ 主な質疑応答から

(写真：会場から発言する皆様)

Q1 (A氏)

高崎さんに伺います。堆肥の一部を輸出しておられるが、①あえて輸出するのはなぜか、②輸出品という商品にする場合の国・行政の対応はいかがか、③畜産DXによる肥育成績の向上に向けどのように取り組み、どのような成果があったのか、伺いたい。



A (高崎)

堆肥の取り扱いに困っていたところ、飼料会社から輸出してはどうかと提案された。このため価格はゼロ円にして、フレコンで100トンを出した。ゼロ円としても、人件費、フレコンバッグ代、輸送費などがかかるので持ち出しである。輸出の話があった時、社内で検討し、輸出で堆肥をはけるならやってみようとなった。現在、今年の6月から毎月100トン、ラオス、カンボジアなどに輸出している。U-Motionの導入による肥育成績としては、病気、横臥の早期発見による効果がある。夜間の監視人をつけており、横臥などの異常を確認している。スマホの情報は誰が見ても分かるので、対応しやすい。現在、脂肪腫が懸念されており、病気の早期発見は重要である。U-Motionのセンサーで餌の摂取量が落ちたところで出荷できることも有利である。これまで首掛け式のセンサーだったが、今年から耳標式センサーを入れる予定である。



Q2 (B氏)

宮崎県では年間400万トンの堆肥が出るが、県内の農地面積は6万haなので、県内では消化できず、県外に5千トン出している。高崎さんに海外輸出できることを伺ったので、検討したい。村田さんの話で、国が減反を進める中、飼料用米で数万haの水田が守られたことを伺い、大きな成果があったと思った。飼料用米の推進に当たり、村田さんのような言い方をすればよいと分かった。原園さんの捕鳥の問題を解決するための捕鳥機の話は、何とかしなければならないと思った。捕鳥機を導入するための国の支援の捕鳥機を導入するための国の支援の感触はあるのか。伺いたい。



A（原園氏）

捕鳥機を入れるための補助金がないか検討した。補助金がなければ無理である。直接の補助金はなかったが別の補助事業があったので、申請している。補助がおりて実績ができれば、障害がなくなり、業界の皆さんも補助を得て導入しやすくなると期待している。

A（村田氏）

飼料用米が来年どうなるか分からないが、コメが作られるのであればよい。16年前、コメは神聖であり家畜の餌にすることに抵抗があった。しかし飼料用米によって水田を守ったのは事実である。需要動向によって生産は変わるが、今は食用米生産の機運が高まっている。

A（高崎氏）

日産10トンの堆肥処理が可能な機械があり、これを入れれば堆肥を撒く農地を減らせる。10台入れば100トン処理できると社内では言っている。堆肥の処理に困れば輸出する方法がある。堆肥処理機を入れる補助事業があればありがたい。

Q3（C氏）

家畜飼養戸数の減少が止まらず、高齢化が進んでいるが、日本の畜産を担う大畜産県の鹿児島県として、5年後、10年後の県の畜産のビジョンをどのように想定されておられるのか。村田さんのおっしゃる消耕畜連携の確立は究極の地域資源管理と思う。秋川牧園さんの取り組みを広げるには、取引先の拡大や研修会などが必要と思う。多収量品種の種子や堆肥の販売で、関東にまで取引先が広がっているが、今回の資料をもとに、村田さんだけではなく、若い社員にも研修会や講演会などで、積極的に秋川牧園の取り組みを伝えていただきたい。秋川牧園イズムといった形で、消耕畜連携が広がれば、行政も取り上げ、取り組みがより一層広がると思う。原園さんの捕鳥機コンテナを含め外国の機械だが、需要に比して開発費が大きいので販売価格は高額となり、スペアパーツの確保、運営なども高額になると思う。このことにどう対応されているのか。またこのような高額の機材であれば、費用対効果は低いと思うが、それでも捕鳥コンテナ、フォークリフトの改良、捕鳥機の導入など高額投資を決断されたのは、どのような事情があったのか。江江夏商事さんの100年企業としてのノウハウがあったのか、伺いたい。

A（村田氏）

現会長からは、いくら内容が良くても熱意がないと伝わらないと言われてきた。鶏糞肥料の利用方法として、飼料用米に熱中させてくれた会長がすばらしかった。1972年から有機農業に取り組み野菜をつくってきた。農業の現場では、土日もなく、炎天下で水やりしたり、苦勞して育てても、価格に反映されない。飼料用米を進めなが農業の未来にきっかけが見つかり、関係者から共感され、続けることができています。

（写真は、積極的な意見が飛び交った意見交換の様子から
話題提供の川野氏は急用で所属の石川氏が急遽登壇）



A (原園氏)

(写真：参加された推進委員の御三方)

捕鳥用の機械はイタリア製で、コンテナ捕鳥のフォークリフトは専用のフォークリフトである。パーツもイタリアから取り寄せる。知り合いの機械技術者が、日本でこのイタリアの会社の代理店をやリ、パーツも買えるようになった。機械のメンテもメーカーにやってもらう。機械の導入時、技術者をイタリアに派遣して、技術を習得させた。

推進委員から (早川委員)

鹿児島県は畜産ビジネスのスケールが大きいので驚いた。経営が6次産業化されている。DX、AWを目的とすると、費用割れを起こすが、自身の経営のためという目的であれば意義がある。3名の発表者の畜産生産と3次産業化、村田さんの飼料用米の重要性といったお話から、畜産を総合産業として位置付けられることが分かった。捕鳥機についても、日本でも製作できるのではないかな。畜産に光が見えたのがありがたい。

推進委員から (三宅委員)

高崎畜産さんの7千頭でのU-Motionの使用について、これだけの規模でDX技術を導入すればどれだけ効率化が進み、効果的か驚かされた。大規模畜産が大規模な耕種農業を行うという今までにない畜産の方向性が示された。江夏商事さんの捕鳥機の取り組みだが、私も捕鳥をやったことがあり大変な作業である。しかも労働力がなくなり、食鳥経営のボトルネックとなる現状で、全国の食鳥経営においても大きな取組みといえる。秋川牧園さんは、資源循環というキーワードで消耕畜連携に取り組まれているが、まさに循環の根幹に当たる。ぜひ全国に広めていただきたい。

推進委員から (川村委員)

高崎畜産さんのU-Motionによる牛群管理は、牛にも優しいDXで、データを見える化しており、素晴らしい取り組みである。江夏商事さんの捕鳥機の導入につき、その投資判断の行動力に感心した。秋川牧園さんは、千葉県の講演会に来ていただき、講演していただいた。資源の地域循環において、畜産農家、耕種農家の活動に、消費者を巻き込むことの重要性を改めて知らされた。

◎ モデレーターからひと言

畜産はともすれば外側の消費者から加害者のように見られ、AWも加害者の対応のように見られる。本ワークショップによりこのような印象を解決する糸口を発信することができたことと思う。

◎ 閉会挨拶から (全日畜 隅 理事)

(写真：隅 理事の閉会挨拶)

SDGsとAWをテーマとしたワークショップだが、経営理念の根幹にかかわるお話をうかがった。困難にあったたじろぎ、歩みを止めるものに対し、立ち向かうものの違いがよく表れたワークショップだったと感じました。本日のご参加、本当にありがとうございました。



(商系団体の略称標記について)

- 全日畜：一般社団法人 全日本畜産経営者協会
- 全日基：一般社団法人 全日本配合飼料価格畜産安定金
- 工業会：協同組合 日本飼料工業会
- 〇〇県基金協会：一般社団法人 都道府県配合飼料価格安定基金協会